

佐伯三十三観音巡り・米水津

吉田勝重

(会員 佐伯市女島)

第八番札所 普門庵

御詠歌

松高き 岸の木のもと

訪ぬれば

光も絶えぬ

法のそま

この普門庵は、浄土宗蔵應山養福寺の末寺である。天保四年(一八三三)の「郷村明細帳」では観音堂名所、二間半四面・瓦葺となつている。

建立年度は佐伯四国八十八カ所めぐり(史談会調査)では享保十二年(一七二七)。明治の寺院明細帳並びに佐伯藩御領分中寺社記(土屋亦兵衛著・佐伯藩寺社奉行)では、延宝四年(一六七六)創建。文化九年再建となっている。開祖開基は観譽上人である。

私たちは秘仏である「正観音(木像伝行大師作)」を拝観

した。

この正観音については、臼杵多福寺三世賢嚴和尚の「十一面観音縁起文」(延宝七年記)に詳しく書かれている。

「十一面観音縁起刻文」を記した賢嚴和尚の多福寺は、慶長五年(一六〇〇)十二月、臼

杵に入城した初代臼

杵藩主稲葉貞通の子、二代藩主稲葉典通が慶長六年(一六〇一)に師事していた了室和尚の為に臼杵二王座に創らせた寺である。臨済宗妙心寺派で正覚山多福寺と称す。

この寺にも寛文十一年(一六七二)に観音堂を建てている。観音堂の名前は普間閣という。

普門庵に残されている縁起刻文を見てみよう。

刻文は五百三十五文字で縦三四センチ横七九センチの板に漢字で彫られている。



夫觀音無作妙力非人天仙凡所可思議譬如一月在天影
現象水雖然月無在不在惟水有清濁也若衆生心水清則
菩薩影現中猶易於俯拾地芥焉豐之後州海部郡佐伯莊
浦白浦十一面觀音囊者入入津浦漁網出現於海中全身
蠟房漁父以為朽木置之岩上夜常有光村民驚異相與注
意觀之即大悲觀音之像也於是建堂參謁奉持一旦海颶
旬殫民屋蕩盡矣厥時此像忽現波越村亦放異光久而愈
明村民敬信建立一字安焉皆年世遼邈莫考其詳載在口
碑而已堂亦廢圯而烏有矣浦白浦成松又右衛門尉政則
者稔聞斯事念不空過渴想久之一日到彼誓而拈灌即三
度無爽其願焉歎躍而昇歸時則延寶二年十一月二十七
日日暮天黑道路冥暗人皆失措俄頃野燎邇起而徑路炳
焉亦非菩薩之爲乎奉之吾廳僅一年越延寶三年六月十
七夜政則夢晶靛襲枕一僧來告非欲嚴飾我必供造地藏
而爲左方脇土覺而驚喜踰一年莊嚴事竣地藏亦造之華
冠瓔珞寶相殊勝余按教中二菩薩常一而二二即一宜哉
夢乎乃因政則之所迷顛末爲記嘗聞菩薩之悲願於濁惡
世爲魚米爲肉山蛙腹鷹巢以足開其信心皆是大悲智光
本無礙於一切處常發現此浦衆生其勝業時節成熟故如
此似非偶然之故政則以增輿信是則信者入佛之門建善

之本也菩薩慈力如海潮相似長短高低挾濶遠近一切洲
渚無不俱到然汝非因像生敬因敬求脫離如無舟筏欲濟
大河無有是處

延寶八年二月觀音誕生日

白杵莊正覺山多福寺賢巖記 印

この縁起刻文を書いた「賢巖上人」は資料によると元和
四年（一六一八）十月生まれの多福寺第三世住職で書画を
能くしていたようである。

この多福寺と養福寺の関係を示す資料は不明である。
「米水津歴史を語る会」の資料には推察であるが・・とし
て、

『当時、賢巖上人の親族に白杵市福良の大橋寺（浄土宗西
山禅林寺派・天文十七年結庵、旧西方寺）の住職、鏡空上
人あり。養福寺と同じ浄土宗であるから鏡空師を介して、
賢巖師に依頼したのではないか。』と、書かれている。

この観音様は、入津浦で漁をしていた漁師の網にかかり
出現したという。全身が蠟に覆われ朽ちた木と思われた
が、夜になると光を発し良く見ると観音様だった。そこで
堂を造り安置してお祀りをした。

しかし、月日が経ちこうした事柄が忘れ去られ、お堂も

廃されていった。浦代浦の成松又右衛門の枕元に一人の僧が現れ観世音菩薩を嚴飾してほしいと。また地蔵を造つて脇士に置けと。その話を夢枕に聞いて信心をより深くするとともに、お堂を建て観世音菩薩を安置したという。

秘仏である『十一面観世音菩薩』の像は、伝教大師の作と言われ、天保四年（一八三三）の作と「郷村明細帳」に書かれていた。高さは一七三センチ。木像の立像である。現在の仏像は延宝三年（一七二四）にかけて、浦代浦の成松又右衛門が修復したお堂に安置されている。新しく造らせた地蔵菩薩とともに地区民の信仰の対象となっている。



十一面観世音菩薩像

《十一面観世音菩薩の頭部》

十一面観音は、『左の水瓶に蓮華をさしたるを持ち、右の手を下げて掲げている。』

この姿を「施無畏印」と云う。頭上の頂上に、如来面が三面（赤）あり菩薩の姿を示している。

右側の三面は菩薩面で牙を出した面で、左側の三面は怒りを表す瞋怒面である。真後ろには大笑いの面をしている。前面には、阿弥陀仏の化佛がある。

全体で十（十）十一面あり、あらゆる方向の悩みを観る徳と力を顕している。

頭頂中央には仏果を表す佛面がある。

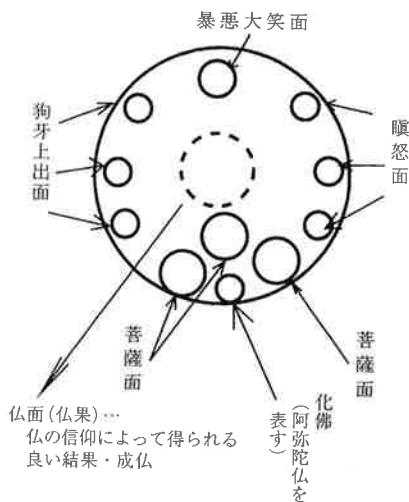


十一面観音頭部

この観音像の他に、毘沙門天像や弘法大師座像等が祀られていた。

庵の入り口には「延宝五〇歳三月吉日〇州〇郡 今津久兵衛」と銘が入った鰐口がかかっている。

鰐口とは仏殿の軒先につるした金属製の大きな鈴で、参拝したときならすものである。大きさは径三九センチあり、現在も使用中である。延宝五年巳年（一六七七）に奉納されたものである。



魚鱗供養塔



又、境内の「半鐘」は正徳三癸巳年七(一三)に豊後浦白、中野源左衛門・中野喜平次により寄進されたものである。鐘の中央部に寄進施主として陰刻されている。

境内の魚鱗供養塔には文政五年(一八二二)壬午六月吉祥日の文字と寄進者の名前が彫られていた。

日向屋惣次、山崎屋善五郎、中屋孫左衛門、郷中連名 森口屋惣吉、貞心尼の名が見られる。

第七番札所 潮月寺観音堂

御詠歌世々かけて 絶えぬ光や 笹竹の

浦の波間に うつる月影

二番目の訪問地は、竹野浦の潮月寺境内の観音堂である。

この潮月寺は明治十五年の寺院明細帳では米水山潮月寺と呼ばれ慶長二年（一五九七）建立。開基は月庵和尚とある。臨光山釣月寺とも云われ、本尊は釈迦如来である。



境内の左手にある観音堂は、佐伯史談会八十八カ所巡り研修では天正五年（一五七五）建立となっている。又、天保四年の「郷村明細帳」では観音堂式間四方、瓦葺、本尊は弘法大師作の正観音となっている。この本尊も秘仏で、ご開帳は正月の三日間とお盆の三日間のみである。

正観音は、聖観音とも呼ばれ、左手に開かざる蓮華を持ち、右の手を少し開き気味にし、花びらの開く勢いを示している。其の心は、「人の心の蓮華が、また開きめの開かせ遣らんと化給ふ御姿である。」



秘仏：潮月寺観音堂正観音

観音様の御開帳を終え潮月寺の境内を散策した。

境内の観音堂前には一基の石灯籠がある。ともするとうっかり見過ごす物であるが、「天保十五年（一八四四）甲辰 奉燈 浦代、折戸兵右衛門、成松六右衛門」の二名の名が刻まれている。

観音信仰は江戸時代に全国的に盛んになるが本来は平安時代の頃畿内で発生したもので西国に広まり、平家討

伐の戦いを通じて関東へ広まっていたと云われている。



観音巡りが全国的に多くなり混雑を防ぐ意味から地域ごとに、西国三十三観音、板東三十三観音、秩父三十三観音等の、名前が付けられた。

この石灯籠の前には、小野篁作と呼ばれる「地藏菩薩像」の地蔵堂や「大乘妙典一石一字経典之搭」があった。

潮月寺山門石段下の門柱（天保十五年寄進・萬屋文右衛門・濱屋庄右衛門）や萬漱盤と銘のある手洗い鉢もあった。

この潮月寺の開山は月庵和尚である。月庵和尚に関する搭銘に「生きていうちに善根功德を修め石塔一基を建て謹んで奉る。瑞祥寺、福巖寺、潮月寺の三カ所を中興した月庵和尚。慶長十年乙巳年（一六〇五）二月彼岸謹んで申し上げる。」の意味の事が書かれている。

搭銘：謹奉建石搭一基逆修善根功德。前瑞祥福巖三所

中興月庵和尚維時慶長十乙巳二月彼岸日敬白。



小野篁作と呼ばれる
地藏菩薩像(地蔵堂)



萬屋文右衛門・濱屋庄右衛門の
寄進名がある門柱

佐伯四国十二番札所 東林庵



三番目の研修地は小浦地区の東林庵であった。

この庵は天保四年の「郷村明細帳」では庵老カ所浄土宗門浦代養福寺末。本尊阿弥陀。但し佛作相知不申。脇立、観音・辨天・薬師・地藏。木佛二而作相知不申。境内豎五間横拾壹間

堂梁行四間桁行六間但茅葺瓦庇高三斗八升御免高此反別三畝式拾四歩とある。

この庵は佐伯三十三観音では無い。佐伯四国八十八カ所巡りでは建立年度不詳。開祖は岡存きよぞんとなっている。

伝える處によると、嘉永元年（一八四八）の建立という。文禄年間には太師堂あるいは阿弥陀堂ともよばれ、阿弥陀如来、観世音菩薩が祀られていたようである。

東林庵は平屋建てで一見集会所のような感じがした。

本堂に入りは三体の本尊を中心に、多くの仏像が並んでいる。



中央の三体は、左より観音様、中央が阿弥陀如来立像様、右が薬師如来で在る。

左側の像は、左手に何か飾り物を持っている。形からは楽器を持つてないが弁財天の様な感じもする。

この東林庵の入り口には、文政四辛巳年（一八二二）二月、慈治代の銘が入った魚鱗供養塔がある。普門庵の境内にあるのと形が違っている。魚鱗供養塔の文字の上に梵字が刻まれている。



魚鱗供養塔

第九番札所 妙智庵・薬師庵

御詠歌 罪深き 身をも捨てじと 夕塩の

契りも絶えぬ 法の船長

四番目の訪問地は色利浦の薬師庵である。

この庵は天保四年の「郷村明細帳」に竹野浦潮月寺の末寺薬師庵として記載されている。亦、同所に禅宗養賢寺末妙智庵が在った事が記されている。



名称 妙智庵
 所属 禅宗御城下養賢寺末
 本尊 正観音（木佛）
 脇立 観世音菩薩
 地蔵菩薩（木佛）
 薬師如来（木佛）
 境内 豎拾貳間 横六間
 本堂 梁行三間桁行六間半
 茅葺
 高 二斗八升

薬師庵は、禅宗竹野浦潮月寺末。本尊薬師如来（石佛）観音。本堂梁行貳間 桁行三間半 茅葺とある。

明治二年（一八六九）潮月寺の末庵として薬師庵が建てられている。本尊は薬師如来である。



妙智庵は元禄年間に建てられた庵で現在は無くなり薬師庵と合併されている。その爲庵の本尊は三体ある左より観世音菩薩・地蔵菩薩・薬師如来である。

寺には三元禄十丁丑年（一六九七）七月十八日、色利浦妙智庵 禅教 庄屋、高木善左衛門、地下中、御手洗達右衛門」銘のある半鐘が残されている。この半鐘は破損し、天保十一年（一八四〇）再鑄したと記録されている。



第一〇番札所

迎むか接しよ庵あん

御詠歌 我が後の 身をばいざなえ 紫の

雲の迎えを まつの戸のうち

米水津地区最後の訪問地は宮野浦の「迎接庵」である。
天保四年（一八三三）の「改正郷村明細帳」に迎接庵の名が見える。享保十八年（一七三三）の明細帳には「観音堂」とある。

明治二三年（一八九〇）の寺院明細帳では宝永四年（一七〇七）に建立され、開祖は浄連和尚とある。養福寺末寺となっている。庵名は資料により「迎接庵」「迎松庵」「観音堂」と異なっている。

迎接庵の「迎接」という文字は観音経の中にあるという。

迎接庵のご本尊は「阿



弥陀如来」で鎌倉時代の恵心（恵比）作と言われている。阿弥陀如来像以外に魚籃観音、薬師如来、千手大権現、阿難尊者等の像が多く配置され祀られている。
また「永代過去帳」に「宝永四年（一七〇七）八月八日没」とある開基、迎接院・台譽浄連大徳の位牌が現存する。
貞享の頃（一六八四～八七）、故人を弔う庵として開いたのが始まりと伝えられている。

迎接庵のご本尊は、阿弥陀如来である。



阿弥陀如来



本陣の左手には「戦傷病没者霊」「宮野浦各家先祖代々之霊位」「江河魚鱗離苦得楽」「十方至三界萬霊」「當庵開基迎接院臺譽浄連大徳・仁譽宗 貞大徳」等の板碑や位牌がある。本陣の右手には三体の仏像が祀られている。



左には魚籃びくを持つていないが「魚籃ぎょらん観音」がある。流れるような姿、形によさに

思わず引きつけられる。

腰をわずかに捻り振り向く顔の目鼻立ちはくつきりとし、慈悲深い相を呈している。像の高さは五三・二センチ。檜材の寄せ木造りである。肉身に金泥を塗り衣に金箔を押し、作者は不明だが幕

末の頃中央の仏師の手によるものだろう。伝承では魚籃観音と伝えられるが、頭巾を被り後方を振り返る姿は水月観音が水面に映る月を見下ろす姿をあらわしたものとも考えられる。本来水月すいげつ観音とし



権現作りの神殿

て作られた像が、後に魚籃観音として信仰されるようになったと思われる。

魚籃観音の隣には権現造りの神殿の中に安置された千手大権現（観音）がある。これは秘仏で三十三年に一度ご開帳されるという。創作年月日は不明である。



この観音大権現のご開帳については、いつから始まったものか記録はない。

この大権現の「開扉千手大権現法會供養」の板碑が最近数枚発見された。

この記録から見ると明治六年、三十八年、昭和十二年、五十二年に開帳したことがわかった。



一番右に薬師如来が祀られている。

阿弥陀如来座像、魚籃観音、薬師如来については天保、享保の記録が残っている。

この三体の仏像の左右・上部には三十三観音像が、一段上の棚には二十五菩薩の仏像が祀られている。

この庵の外、右端に一基の魚鱗供養塔がある。

正面には「江河魚鱗離苦得楽」、側面には享保五年の文字が見える。

この迎接庵の研修を最後に六十四名の会員が参加した「第二回佐伯三十三観音巡り・米水津地区」は終了した。次回は鶴見地区である。



箱に入れられた三十三観音像



「江河魚鱗離苦得楽」「享保五年庚子天」の文字が見える魚鱗供養塔